

宗教的変容（回心）としての教化

—教化の構造的理解へ向けて—

鈴木晋 怜

はじめに

教化という用語は、広範な意味を含んでいる。教師一人一人が、教化という同じ言葉を使いながら、実は、それぞれが別々のイメージを持っている。それ故に教化をめぐる議論をしても、各々が各々の教化に対するイメージを引きずったまま論ずるので、なかなか議論がかみ合わないのである。ある人は、僧侶の立ち居振る舞いすべてが教化であると言い、ある人は、伝道、布教、法話こそが教化であると言い、またある人は、密教儀礼こそが教化の本質だという。

さらに、教化こそ宗団の生命線であるという主張がある割には、他の分野に比べて教化の位置づけは低い。特に、教学研究を専門としている人たちのもの言いには、一見、教化の重要性を説いているような場合でも、その言葉の裏側に「教化なんて」という蔑みの匂いが感じられることがある。教学や事相よりも教化という分野は一段低いものという認識がどうも彼らにはあるように思われる。

要するにいろいろな意味において極めて曖昧なままで、教化という言葉が使われ、教化について語られているのである。教師の誰でもが、教化については一家言もっているけれども、しかし、それらはいかにも雑然としていて、まとまりがない。教師一人一人が、教化については、ある意味では専門家であるけれども、しかし、それは一つの体験談であったり、個人的見解であったりするだけで、体系化された理論にはなっていないのである。ここに教学研究との大きな違いがある。

そこで本論では、教化というものを少し厳密に概念規定し、錯綜した教化イメージを整理してみたい。

一、教化の動機

教化とは言うまでもなく、教化をする者（教化者）と教化をされる者（被教化者）という両者の関係性の中で成立するものである。そのどちらを欠いても教化は成立しない。そして、前者には、教化をするという行為が生じ、後者には、教化を受けるといふ行為が生ずる。

そして、人間がある行為をするということには、原則として、何らかの動機がなければならぬ。教化者には、教化をするための動機があるし、被教化者には教化を受けるための動機がある。それでは、教化者はどういう動機で教化を行い、被教化者はどういう動機で教化されるのであろうか。

人間の行動の動機には、大別して二種の動機があると思われる。一つは、内発的動機であり、もう一つは、外発的動機である。内発的動機とは、行為それ自身を目的として行われる行為であり、自らの内的な欲求を動機とする。それに対して、外発的動機とは、行為に伴う外的な報酬あるいは満足を目標として、その達成のために行為するというものであり、行為それ自身のための内的な欲求というよりは、それに伴う損得やあるいは外圧からの要請などが、行

動を起こすための動機となる。それでは、教化者・被教化者の動機について、この二種の動機別にさらに詳しく分析してみよう。

〈教化者の動機〉

a 内発的動機

①教義の宣布

教義と宣布とは、自らが信仰する教義を広く世間に広めることである。換言すれば、自らが信仰する宗教的な世界観・価値観を社会のなかに構築し、世界を宗教的に意味づけようとする動機である。

②自己表現

自己表現とは、一種のパフォーマンスであり、自らが、修得したこと、体験したことを表現することによって、自己拡大し、自己満足する。教化の場合は、彼らにとってパフォーマンスの場であり、そこで自分をいかに表現するかが最大の関心事となる。

③救済（変容）

救済とは、宗教の一つの根幹をなすものである。救済機能を持たない宗教こそは偽りの宗教である。従って、教化をする者は、本来的には、常にこの救済ということをその行為の動機としてもたなければならない。

教化をめぐる議論の中で、よく、次のような意見が提出される。「我々は、自分が悟ってもいないのに、他者を救

うとか、教化するとかいうのは、はなはだおこがましい。自分がまだ迷っているのに他者を救うことなどできない。」

もちろん、我々が救済行為を行う場合、我々一人一人が悟りを体験しているわけではないので、我々が変わらずに相手だけを変えていくということは不可能である。従って、この場合の救済とは、他者の救済に関わることによって、自分自身も救済されていくということに他ならない。ある行為を通して、教化者も被教化者も宗教的に相互変容していくということである。そして、この相互変容ということが、後述するように、教化において、決定的な意味を持つと考えられる。その行為が教化的行為であるかどうかは、その行為を通して宗教的変容がもたらされたかどうかということによって決定される。

自分が悟っていないからといって、救済行為をおこがましいと敬遠することは、アマチュアリズムとしては謙虚で美しいけれど、それは、一種の逃避・弁明に過ぎない。

b 外発的動機

① 経済的動機

経済的動機とは、寺の拡大、あるいは経済的基盤の向上のために教化を行うというものである。一見、こうした動機は不純なように思われるが、経済性は寺院を維持・運営していくためには、非常に切実な問題である。平成七年度実施の本宗総合調査によれば、年収500万以上の寺院は、全体のわずか、28.5%に過ぎない。一億総中流化と言われる日本において、本宗寺院の貧富の差は、極めて大きいと言える。

従って、教化活動をすることによって、結果的に寺院の収入が増えるとするれば、それを一義的目的として、教化を

展開していくということも、大きな動機となり得るのである。

② 時間的動機

時間的動機とは、誤解をおそれずに言えば、余暇の充足ということである。これまでの本宗総合調査の結果から、本宗の教化活動の実態を分析してみると、地域性・経済性・人的資源という三つの要因が教化活動に影響を与えるキーワードとして浮かび上がってくるが、その内の、経済性という問題に限定して見てみると、経済的大規模寺院と小規模寺院に比べて、中規模寺院の住職に比較的、教化活動に対する関心が高い。その理由としては、次のようなことが考えられる。まず、大規模寺院（大本山・別格本山クラスの常に職員をおいているような場合は別として）は、日々の檀務に追われて、それをこなすのが精一杯で、なかなか、教化ということを意識した活動にまで手が回らない。また、小規模寺院の場合は、住職は兼職を余儀なくされているので、とても、教化をするような時間的余裕がない。それに比べて、中規模寺院の場合は、兼職しなくても寺院収入だけで生活できるし、かといって、檀務に忙殺されるほど忙しくもない。時間的な余裕はある。その時間を、良く言えば、檀信徒教化のために有効に利用しようということだし、悪く言えば、空いた時間を何もしないのはなんだから、じゃあ、教化でもしてみるかということである。

この時間的動機も、物理的に教化について考えたり、活動したりする時間がなければ、それを実践するのは不可能なわけなので、教化の重要な動機となると考えられる。

③ 義務的動機

義務的動機とは、制度への適応ということである。真言宗智山派宗法第八条には次のように記載されている。

「本宗の宗制は…（中略）…宗団の和合と興隆とを念願する全宗門の堅い信念に基づいて定められたものであるから、本宗に所属する僧侶及び檀信徒はその信念と信仰とによって、これを守り、運営しなければならない。」

そしてさらに、第九条には次のような条文がある。

「本宗の教化は、全宗門人がこれを行なわなければならない。」

従って、我々が宗門人である限りは、宗制を守らなければならない。その宗制には教化をすることが義務づけられているのであるから、それが動機となるのである。

④強迫的動機

強迫的動機とは、周辺環境からの要請ということである。本人自身は、別に教化ということに特別な関心をもつてはなく、それをやる必要性も感じていないけれども、「近隣〇〇寺では、法話会をやったり、写経会をやっている。

△△住職は熱心にいろいろな教化活動を展開していて、檀信徒や近所の人にとっても評判がいい」というような情報を耳にして、何となく、そうした周辺環境からのプレッシャーを感じて、「じゃあ、自分も何かやらなくては」という強迫的な動機にかられるのである。

〈被教化者の動機〉

a 内発的動機

①危機的動機

宗教を切実に必要とする人は、その心にある種の危機を抱いている。それは、不安全感、あるいは欠落感といっても

いかかもしれない。かつての宗教への主要な入信動機であった貧・病・争はまさしく経済的・身体的・社会的な危機からの救済を求めるものであるし、現代社会のいわゆる“癒しブーム”も豊かな物質的環境にありながら何か精神的に満たされない、その自己不全感・欠落感を充足し、全体性を回復しようとする現象として捉えられる。

その社会あるいは文化の中心を成す価値観と自らの価値観との間にギャップが生じた時、あるいは、社会・文化の価値観から自らがはじき出されてしまった時、さらには、かつて十全であったものが否応なく喪失させられてしまった時、人は強く宗教を求めるのである。

②探求的動機

危機的動機が欠落したものの充足、不全なるものの十全化という意味合いをもつものに対して、この探求的動機とは、より高次なもの、より完全なものを求めるために宗教に関わるという動機である。自らの人格的成長や宗教的自己実現を求めたり、真理を探求するために宗教を必要とする。

b 外発的動機

①受動的動機

被教化者の内発的動機が、自ら積極的に宗教に参加する動機であったのに対して、この動機は、他者あるいは周辺状況からの要請、もしくはそれらへの追従として参与するというものである。昔からの習慣・習俗だから、檀家としての義務だから、みんながやっているから、等という非主体的動機で教化場面に参与するという場合である。

以上、教化者が教化をする動機、及び被教化者が教化場面に参与する動機をまず、内発的動機と外発的動機に分類し、さらにそれぞれの動機についていくつかの要因に分けてみた。ここに列記されている動機はあくまでも類型化されたモデルであり、これらの動機が、一人の教化者あるいは被教化者の中に常に単独で働いているというものではない。いくつかの動機が複合されて、一つの教化（被教化）行為を起こしている場合もあるし、時間的経過と共にその動機が変化していく場合もある。

しかし、いずれにしても、まず、自分が行う教化行為というものがいかなる動機に依るものであるのか、さらには、その教化場面に参与する人が何を求めているのかということ进行分析しなければならない。なぜならば、それによって教化のあり方あるいは手法が大きく異なるからである。例えば、経済的動機から教化を行うという場合は、結果として寺院に経済的効果をもたらすような教化のあり方を考えなければならないし、救済ということをその動機として教化を行う場合は、被教化者として危機的動機をもっている人を対象としなくてはならない。

教化というものは、あくまでも、教化者と被教化者との相互な関係性の中で成立するものであり、一方的なものではない。そして、両者の間に関係性が成立するためには、それぞれが一つの教化場面に参与するその動機の間、何らかの通路が開かれていなければならないのだ。

二、教化の構造

教化のあり方が一様ではないことは、前述の通りである。従って、自分が行う教化とはどのようなものであるかということを、それぞれがまず概念規定し、そして、次にそれに基づいて教化の構造を組み立てていかなければならない。本項では、そのための一つの作業仮説として教化を定義し、それに基づいて教化を構造化してみたい。

〈教化の定義〉：一つの作業仮説として

『教化とは、ある宗教的確信をもつ者が、それに基づいて他者と直接的・間接的に関わることによって、その他者に何らかの宗教的変容（回心）をもたらすことである。』

この定義はいくつかのポイントによって構成されている。次にそれぞれのポイントについて考察してみよう。

①宗教的確信

宗教的確信とは、教化の前提であり、教化者の必要条件である。これがなくては教化は成立しない。しかし、ここで言う宗教的確信とは、「悟り」という意味ではない。もとより、我々は、積尊のように完全なる悟りを得ているわけではない。一人一人は、様々な苦悩をもち、欲望に満ち、執着を抱えている。「教化などおこがましい」という言説は、ここに由来している。「悟ってもいない我々がどうして教化などできるのか」ということである。しかし、悟らなければ教化はできないというものは、前述のように、一種の逃避であり、弁明に過ぎない。我々は悟っていないけれども教化はできる。

ただ、少なくとも、ある宗教的確信はもっていないなければならない。それは、自らの信仰に対する確信でも、教化者の個人的な回心体験でも、教理解釈でも、僧侶としての生き方についての確信でも何でもよい。宗教者としての自己の内に存する確信である。何か一片の確信さえあれば、それが、教化への可能性を開いていく。そして、それは、後述するように、宗教的変容の目標（誘因）となり、また、教化をする者のカリスマ性につながっていく。

いかなる宗教的確信をもっていない者は、教師にもなれないはずである。それはもう教化以前の問題である。

② 教化の対象

前にも述べたように、教化とは教化をする者（教化者）と教化される者（被教化者）がいて、その関係性のなかで成立する行為である。従って、教化者はまず教化の対象である被教化者について理解しなければならぬ。

教化の対象理解とは、誰を教化するのかということについての理解であり、その「誰」（対象）の中には、個人的属性と個人をとりまく周辺状況が含まれる。個人的属性とは、年齢・性別・教育程度・性格特徴・イデオロギー・抱えている問題の所在などが変数として考えられ、個人をとりまく周辺状況とは、さらに、巨視的周辺状況と微視的周辺状況に分けられる。巨視的周辺状況とは、広域的環境の文化的社会的周辺状況である。現代日本社会においては、例えば、科学的合理主義、物質中心主義、価値の多元化、近代的自我確立の要請などが挙げられよう。これらの巨視的周辺状況は、その文化の中の人々の精神性あるいは志向性に無意識的に大きな影響を与えていると考えられる。微視的周辺状況とは、家族、居住地域、友人関係、職場関係などのより身近な世界のことである。これらのグループは、その個人に直接的で固有な影響を与えていると考えられる。

教化の対象が違えば、当然、教化者との関係性も変わってくる。そうなれば、必然的に教化のあり方も違ってくる。教化を有効に進めていくためには、対象理解は不可欠であり、それに基づいて、柔軟に対応していかなければならない。その意味において、ある一つの教化行為は、共通する変数をもった対象に対してなされるべきであり（ピンポイント教化）、異なった変数をもつ者に同一の教化行為（マルチポイント教化）をなしても、それは有効に機能しないと考えられる。

③ 関与（コミットメント）の仕方

関与（コミットメント）とは、教化者と被教化者の関係性のことである。すなわち教化者と被教化者の出会いの状況であり、その後の関係の持ち方を意味する。

出会いの状況とは、被教化者の情緒的・知的・認知的要求と教化者の要求との相互作用のもとで構築される。前述の教化者と被教化者のそれぞれの動機がどのように関係しあうかという場面である。両者の間に何の繋がりもなければ、関係性も構築され得ない。例えば、霊障に悩まされていてとにかく拝んでほしいという人が来た時、仏教は霊の存在を認めないから拝む必要はないという対応をしたら、両者の間に関係性は成立しない。被教化者の要求を受け入れ、関与していく中で、被教化者も教化者の要求を受け入れていくという相互変容のプロセスを通して教化は進行していく。

さらに両者の出会いの状況として、直接的関与と間接的関与とがある。直接的関与とは、一対一すなわち man to man で出会うという状況であり、両者の要求がストレートにぶつかり合う。また直にそのプロセスを追うことができる。間接的関与とは、儀礼やメディアを通して両者が間接的に出会うという状況をさす。この場合、教化者と被教化者の間には、予めある程度の合意はなされている（例えば、祈願法要を一つの教化場面とすると、両者は「願いを叶える・願いが叶う」という要求で一致している。）が、後述するような教化の結果を検証することが困難である。

もう一つ、関与ということで考えなければならないことは、その時間と強度の問題である。この二点から関与の仕方を考えるならば、それは長期的漸成的関与と短期的激变的関与という二種があるように思われる。長期的漸成的関与とは、長い時間を要して徐々に宗教的変容をもたらしていくという関与の仕方である。この場合、被教化者はその宗団の教え、価値観、生活様式、期待などについてより多くのものを学びながら、比較的理性的に変容していく。それに対して、短期的激变的関与とは、ごく短い一定期間の間に急激な変容を与えるもので、当然、被教化者に与える

情緒的精神的インパクトは強大なものとなる。

④宗教的変容

宗教的変容とは教化の本質である。これがもたらされるか否かでその行為が教化と呼べるかどうかを決定すると言っても過言ではない。布教あるいは伝道という行為と教化という行為はこの点で異なっている。すなわち、布教あるいは伝道とは、それを成す者の行為の目的あるいは結果に重点が置かれた言葉であるのに対して、教化とは、それを成す者と成される者との相互作用のもとで生ずる双方の宗教的変容もしくはそのプロセスを本質とするのである。宗教的変容とは、その人の思考、感情、行為の質的变化であり、人格の総体的変容ということが出来る。そして、それらは具体的に次のような現象として現れる。

・入信

これは、いかなる宗教もたないあるいは最小限度の関わり方しかしていない者が、信仰の制度あるいは共同体に属するようになるという動きである。

・強化

これは、被教化者が以前の形式的あるいは略式的の入信状態から活性化された信仰をもつように変化することである。それは、一つの宗教制度の名ばかりの構成員が自分たちの信仰やその宗教制度への関与を自らの生活の中心の焦点とする時、あるいは人が深い宗教的経験や感情を激しく揺さぶるような新しい洞察を通して宗教への関与を深め、そして強めるときに生ずる。

・移行

これは、一つの宗教的伝統から他の宗教的伝統へ、あるいは、ある宗教的伝統の中の一つの共同体からの別の共同体へ移行することを意味するものである。換言すれば、一つの世界観、儀礼体系、生活様式からの別のものへの移行である。この現象は、便利さ（地理的隣接）あるいは深い宗教経験に基づく重大な宗教的变化がその原因として考えられる。

・背教／脱会

これは、それまである宗教に関与していた者が、その宗教的伝統あるいはその信仰と決別することである。この変化は、移行のように新しい宗教的見地の受容を意味するものではなく、多くの場合は、非宗教価値体系を採択した結果として生ずる。

三、教化の検証

前節で述べたように、教化の本質が宗教的変容であり、その行為が教化であるかどうかは、何らかの宗教的変容がもたらされたかどうかというところで決定されるとすれば、それを検証することが不可欠である。ある教化者が教化的行為をなしたとしても、被教化者に何の宗教的変容ももたらされていないならば、その行為は教化とは呼べない。

それではどのように検証することができるだろうか。

宗教的変容は行動的変容と心理的変容に分けることができる。多くの場合、心理的変容はそれだけにとどまらず、行動的変容と結びつくので、最も単純な検証方法は、被教化者の行動を観察し、それに変化があったかどうかを分析することである。なかでも、入信、背教／脱会の場合は、明確な行動変化として知ることができる。強化の場合は、寺を訪れる回数、行事への参加率、教化者への接触度、会話の内容、布施、寄進の額および質などの変化として捉え

ることができよう。これらの測定尺度および測定方法は、比較的容易に作成できると考えられる。

ただ、こうした行動的変容は、宗教的変容の結果として現象化したもので、ある教化的行為が教化として有効であったかどうかを判定するうえでは重要な手がかりとなるが、教化というプロセスのなかで、何がどのように変わったかということを検証するものではない。すなわちAという教化者がBという被教化者に対して、その両者の関係性の中で行った教化的行為を通して、両者の内にとどのような変化が生じていったかということを検証するものではないということである。もし、教化というものが一連のプロセスをもって進行していくものであるとすれば、それを有効に進めていくためには、それぞれの教化場面における処方箋をつくりだしていかなければならない。そしてその処方箋をつくるためには、ある全体的な教化の構造を設定した上で、その都度その都度、細かな仮説―検証を繰り返して行かなければならないのである。

しかし、この細かな仮説―検証というものを、客観的科学的に行っていく、あるいはそのための誰でも活用できるような方法的マニュアルをつくるということは非常に困難である。なぜならば、教化というものは、基本的にある教化者となる被教化者の固有な関係性のなかで進められていくものだからである。従って、その教化者が自らの教化場面のなかで、自分の仮説を立て、自分の洞察力でそれを検証していくほかはないのである。

四、まとめ

誰にでも共通する教化など存在しない。教化とは教化者と被教化者の関係性のなかで進行していくが、両者にはそれぞれに教化場面に参与する動機がある。教化者はまず、自分がなぜ教化を行うのかということ进行分析し、さらに、被教化者はどういう属性や背景をもった人間で、何を求めているのかということを知らなければならぬ。その

上で、両者が教化的関係を構築できるような教化の構造を設定し、実際の教化的行為のなかで様々な仮説―検証を繰り返しながら、宗教的変容をもたらしていかなければならないのである。

従って、言いつばなし、やりつばなしの教化はあり得ない。また、思いつきの教化もあり得ない。その意味において、教化という用語は、そうそう安易には使えない。何でも教化というわけではないのである。